

日も暮れ始め、暑さも和らぎだした夜七時前。運動部のランニングの掛け声があちこちから聞こえてくる。木下祐樹は、たまりにたまった監査委員会の仕事を途中で放り投げ、帰宅しようとした。そのとき、自分の下駄箱に、靴しか入っていないはずのその下駄箱の中に入っている異物に目がいった。祐樹は、その異物の手を伸ばす。

固まる。

ピンク色の便箋だった。裏側はハートのシールで閉じられており、『二年三組 加藤京子』と丸っこい字で書かれていた。明らかに、誰が見てもラブレターだ。

祐樹はその手に初めて、ラブレターなるものを手にしていた。

まさか、こんな少し古い方法で告白されるとは思わなかった。ましてや、携帯電話という便利ツールが普及している現代に、まだラブレターが存在しているとは……

「いや、いや……」と祐樹は首を横に振った。この世界に生を受けてから、一七年。告白されるといったことからは縁の遠い人生を送ってきた。

だから、祐樹はまずドッキリを疑った。男友だちが書いて、舞い上がっている様子を見て楽しんでいただけ。そうに違いないと……しかし、可愛らしい丸文字を使う気持ち悪い男友だちに心当たりはない。また、そんな器用なことができる男友だちの記憶もない。

次に考えたのは、隣りと間違えてないかだ。左隣りの下駄箱は石倉くんだ。石倉くんは違うと思う。暗めで男の祐樹でさえ、ほとんど話をしたことのない人付き合いの苦手なタイプの子だ。では、右隣りは野球部のエースで四番、そしてイケメンと三拍子揃っている佐伯だ。男の祐樹でさえ惚れ惚れする男前さだ。

と、あれこれ考えてみても仕方ない。自分のところに入れられていたのだから、たとえ間違えていたとしても言いわけがきく。シールをはがし、その手紙を開く。

突然の手紙、失礼します。

初めまして。

今回、手紙を書かせていただきましたのはお願いがあるからです。

私は先輩のことを初めて見た日から好きになってしまいました。

先輩が一生懸命仕事をしている姿に惹かれました。

先輩のことをもっと知りたいです。

よろしければ先輩のことをたくさん教えてください。

明日の放課後、体育館の裏で待っています。

加藤京子

手紙を読み終え、そっと手紙を戻す。一息ついて、呟く。

「ラブレターじゃねえか」

しかし、名前がない。祐樹だと特定するすべはない。とりあえず、帰るか手紙を鞆にしまお

うとした、そのとき。

「ゆーき！ 何してんの？」

突然後ろから声をかけられた。振り返りつつ、慌てて手紙を後ろに隠す。

声をかけてきたのは、祐樹の幼なじみである真鍋まなみである。この学校の生徒会長で、学園のマドンナ。この学校でものすごい人気を誇っている。そして、祐樹が小学生の頃から想い続けている相手でもあった。

「いや、特に何も？」

「背中に隠したものはなーに？」

と、ぐーっと顔を近づけてきた。恋い慕っている相手にそのようにされ、動揺しないわけがない。少しの汗に交じって、いい香りがする。そう油断していると、そのあいだに手紙が奪われていた。

「おい、返せよ」

しかし、まなみから手紙を取り返せない。男と女なのだから力づくで取り返そうと思えば取り返せたのだろうが、乱暴なことではできなかった。

「これ……ラブレター？」

そう呟くとさっそく中身を確認していた。すぐに読み終わると、まなみは祐樹に向かって言う。

「今日は私の部屋で作戦会議ね」

扉を開けるとそこに桃源郷があった。

まなみの部屋は整理整頓されており、女の子の匂いがした。まなみはしょっちゅう祐樹の部屋に来るが、祐樹は久々にまなみの部屋に入った。小学校の頃とずいぶん変わっている。人形の数が増えて、女の子らしくなっていた。

祐樹の胸は張り裂けそうなくらいに『ドクンドクン』と音を立っていた。女の子の部屋——好きな人の部屋に入るのにこんなに緊張するとは思わなかった。

「何、そんなところで突っ立てるの？」

そう言って、まなみは祐樹に座るように促す。その指示に従っておとなしく座る。

「加藤京子って子なんだけど、実は生徒会を手伝ってくれてる子なのよね」

まなみは、話を始める。加藤京子の良さについて、延々と話を続ける。

「で……どうするの？」

「どうするって？」

「ラブレターの返事」

祐樹は少し思案し、答える。

「さっき聞いた話では、加藤京子さんはいい子だったけど、やっぱりまなみの話だけだろ。自分の目でその子のことを見てみたい」

相手のことを知らないで付き合っているのは、不誠実だと思った。だから、そう答えた。

「やっぱ、祐樹ってそういうやつよね」

まなみは感心していた。

「それに……」

「それに？」

祐樹は「好きな人がいるから」と、口走りそうになった。
「なんでもない。じゃあ、俺、帰るわ。今日はありがとな」
「それに、何よ」

祐樹は都合が悪くなり逃げるようにして、まなみの部屋から出ていった。

翌日の授業はほとんど頭に入ってこなかった。

祐樹のことを好きと言ってくれた加藤京子。祐樹がずっと想い続けてきた真鍋まなみ。二人が頭の中でめぐるしく交錯する。

そんなことを考えてるうちに放課後はすぐにやってきた。

一日考えた。そして、この結論に至った。

まだ運動部の活動が始まっていないのか静かな体育館の隣を通り抜け裏へと入る直前、一呼吸おいてから歩みを進める。そこにいたのは、眼鏡をかけたおとなしそうな女の子だった。まなみが言っていた通りの女の子だ。

「加藤京子さんだよね」

「はっ、はい」

京子は緊張しているのか、口に出した言葉が振えている。

「きよっ、今日はこっつ、こんなところに呼び出し、ごめんさい」

「落ち着いて、深呼吸して」

京子は祐樹に言われたとおりに深呼吸する。それで少しだけ落ち着いたようだ。それを確認してから。

「さっそくだけど、手紙の返事させて欲しい。いい？」

「はっ」

「ごめん。加藤さんとはつきあえない。好きな人がいるんだ」

祐樹は頭を下げる。下げ続ける。しかし、京子からの反応がない。祐樹が頭を上げ京子を見ると目に涙をためているのがわかった。

「違うんです。この手紙は木下先輩に、まなみ先輩のことを教えてもらいたいと思ってかいたんです」

京子の強がりだ。京子は祐樹のことが好きなんだと伝わってくる。

「この手紙に、まなみ先輩って補っても伝わりますよね」

突然の手紙、失礼します。

初めまして。

今回、手紙を書かせていただきましたのはお願いがあるからです。

私は『まなみ』先輩のことを初めて見た日から好きになってしまいました。

『まなみ』先輩が一生懸命仕事をしている姿に惹かれました。

『まなみ』先輩のことをもっと知りたいです。

よろしければ『まなみ』先輩のことをたくさん教えてください。

明日の放課後、体育館の裏で待っています。

確かに、それでも伝わる。しかし、京子の表情は無理に笑っているように見えた。ここで祐樹が、「俺のことが好きなんだろう」といえば、彼女の涙の堤防が決壊してしまうに違いない。そんな彼女の姿を見てしまえば、祐樹の覚悟が揺らいでしまうかもしれない。だから、それに触れないことにした。

それから、まなみについて知っていることを話した。そのあいだ、京子はひきつった笑顔でそれを聞いていた。

「先輩の好きな人って誰なんですか？」

話し終わり、最後に京子はそう聞いてきた。

祐樹はその日、まなみに告白したのだ。そして……